

リンパ腫の放射線療法施行例では全例緩解が得られ良好な結果が得られたが、30%に局所再発が認められた。化学療法施行例では88%の緩解率が得られたが、63%に再発が認められた。これらの結果より、T細胞性リンパ腫では緩解が得られても、再発に対する十分な注意が必要であると考えられる。

5. Helical CTによる門脈の3D image

岩田良子 (国立がんセンター東)

6. シンナー中毒症のMRI像

根本和久 (榛原総合)

7. 脳ドックのMRスクリーニング検査

山田常久 (塩谷総合)

近年MRI装置の普及とともにMRIによる脳ドックが行なわれるようになり、通常の間ドックでは不十分な脳血管障害の検査が可能となった。当院でも平成5年5月に脳ドックを解説し、12月までに300例の撮像を行った。そのうち250例に検討を加えた。

検査方法：装置は0.5TのVECTRAで通常のT1、T2強調画像の横断像の他、MRAとして、頭部正面(PC法) Willis輪を中心とした多方向投影像(TOF法)を撮像している。異常が疑われた場合は、Target imageを行いさらに血管造影を行った。

検査時間は約50分、費用は一般で約3万円である。受診者は男182名女68名、年齢は30から71才平均年齢45.4才。250例のうち何らかの異常が見つかったのは27件であった。内訳は、脳梗塞を疑われたのが16件で最も多く、脳動脈瘤が疑われた例は3例、そのうち血管造影を行ったのは1例であったが、偽陽性であった。

脳梗塞例は症状がなく、受診者に無用な不安を与えない配慮がされた。また未破裂動脈瘤の扱いについては、課題が残っている。

8. CO₂ US angiographyの経験

安藤策郎 (茅ヶ崎市立)

9. ¹³C-MR spectroscopyの臨床実用化に関する研究

池平博夫, 有水昇 (千大)
加藤博敏, 古賀雅久, 舘野之男
(放射線医学総合研究所障害・臨床研究部)

1.5T以上の臨床用高磁場MRIの性能が向上したこと、なかでも0.1ppmを越える非常に良い磁場の均一

性が得られる様になったことで、人体においても¹³C-MRS計測の実用化がいよいよ現実性をおびてきました。

¹³C-MRSを商用機で行うためには、ユーザーが安全性を慎重に考慮しながらこれを自ら準備する必要があります。

¹³C-MRSの対象は、肝臓や骨格筋などにおけるグルコース代謝を評価することが考えられます。しかし、画像化など相当の空間分解能は、今のところ期待できません。¹³C-MRSを利用したグルコース代謝動態は、耐糖能の低下や糖代謝異常などの病態によって影響を受けることが予測されますが、今までできなかった肝実質で生じているこのような変化を直接観察することが、¹³C-MRSによって初めて可能となるのです。

10. 頭蓋内結核腫の1例

堀部光子 (国療東京病院)

11. 頭頸部腫瘍に対するaccelerated hyperfractionated irradiationの経験

幡野和男 (千大)

12. 放射線治療後の披裂部の浮腫の検討

酒井光弘, 伊丹純, 宇野隆
芹沢誠一, 荒木仁, 有水昇
(国立国際医療センター)

[目的] 放射線治療後における披裂部の浮腫の変化と残存腫瘍および後障害との相関について検討した。[対象と方法] 喉頭を含む照射野で放射線治療が施行され、喉頭fiberscopeで治療期間中、終了後の喉頭の所見を経時観察した39例を対象とした。疾患別内訳は、喉頭癌23例、下咽頭癌9例、重複癌2例、その他7例であった。披裂部の浮腫に対し、我々が考察したGrade分類(Grade1, 2a, 2b, 2c, 3, 4)を適用し、その推移を観察した。治療終了後の観察期間は、喉頭摘出術または死亡した例を除いて6ヶ月以上のものに絞った。対象を照射野面積により、A群($6 \times 7 \text{ cm}^2 \geq S$)とB群($7 \times 7 \text{ cm}^2 \leq S$)に分け、放射線治療終了後の浮腫のGrade、および、その推移と喉頭微細術、喉頭摘出術の病理所見との相関について検討した。

[結果] A群では、治療後のGrade上昇例はなく、喉頭摘出術施行例は1例であった。B群では28例中、Grade上昇例は23例、喉頭摘出術施行例は10例であった。10例中、残存腫瘍陽性例8例、壊死の存在例2例であり、このうち手術前の喉頭微細術にて残存腫瘍陽性例は6例であった。

[結論] Gradeの大きい例、上昇例は照射野面積の増